はしがき

人皇第四五代聖武天皇の御即位第一年に勅願によって建立された三州の財賀寺はその当時は全山数百坊の大伽藍であって全国にその名をしられてゐたと伝えられる。その財賀寺に昔から正月五日の日にお田植まつりが行われる。口碑によれば源頼朝がこの寺に源家の興隆武運の弥栄を祈念した。その甲斐あって源平の合戦は次々に大勝を得て文治元年平家は檀浦の海戦で藻屑を消え失せて滅亡して源氏の天下をなった。それから間もなく奉賽のため財賀寺を再建し仁王門をも建立した。頼朝はみすからこの普請を督したともいわれている。竣工落慶の時からこのお田植まつりが始まったともいわれるがそうかも知れないと思われる節がる。古謡の中の法性寺と法勝寺はその当時の少し前に建てられたお寺でその頃有名なお寺であったし、稲の害虫の中にウンカがないのである。源平合戦の後ウンカが大流行していねを喰い荒した事があり誰言うとなく斎藤実盛の亡霊化してこの虫となったと慰霊の行事等が明治初年頃までウンカ送りと言って行われたりしたのであるが古謡の中にウンカが無い所を見るとウンカ大流行以前であったろう。又その頃は財賀の山にも鹿が野棲していたと見える。さてはっきりとは何時から始まったかわからぬことまつりは禳田祭田遊祭田楽祭とも称せられ伝統久しい古式によって村中でも名門の人々が身をきよめて観音様の御宝前でおこなう。今から二百八年前即ち宝暦二年に時の住職昶如上人が観禳田記を書き残している。漢学流星時代に学識豊かな上人が古典を縦横に駆使して執筆された名文で立派なものである。後学のしかも浅識な者がおこがましいが現代語に直して今の方々にもわかる様に致したいと思いついて拙文を綴りました。少しでもお役に立てば幸です。誤訳があったら御叱正下さい。

昭和三十五年極月吉日 鳥山吉次

現代語訳観禳田記 鳥山吉次拝訳

お田植祭りを観つの記

毎年正月五日に我が観音堂のみほとけの御宝前に於てその年の災厄をはらって豊年を祈念するお田植祭りが行われる、この日近郷近在からこのおまつりを拝観しようと老若男女はどっと御つまり人垣を作って拝観する、そしてこのお祭りをする役人（やくうど）は司祀（しし）一人田畯（でんしゅん）一人田夫（でんぷ）三人撃鼓（げきこ）一人擕罇者（けいそんしゃ）一人饁者（ようしゃ）一人為負児婦者（いふじふ）一人為催者（いさいしゃ）一人駆牛者（くぎゅうしゃ）一人合計十一人である。司祀とはこのまつりの主人公の役目、田畯とは田を見廻るお役人、田夫とは農夫、撃鼓は太鼓をたたく人、擕罇者とは酒樽を持って出る人、饁者とは田へお弁当を運ぶ人、為負児婦とは幼児を背負う女の人、為〓者とは〓（白牛）になる人、駆牛者は牛つかいである。さてそのお祭りに使う道具たるや古雅簡朴そのものであって気を断ってスキの形を作ったり葉を結んでカサの形にしたり木の葉を束ねて稲の苗だと言いどれもこれも見るからに微笑ましいもの許りである。役人（やくうど）十一人宝殿に参集して先ずドンドンと太鼓をたたきこれからお祭りが始まるのである。太鼓を中央にしてミノを肩にかけたりスキを杖にしたりして三面に並び打ち鳴らす太鼓の音に合せてつつましく古調を帯びた歌謡をうたい上げるのである。その歌の文句は「ようしんや　たをつうくる云々」と訳文の条下に記した通りである。その歌の文句を昶如上人が漢訳されたものは原文の条下に記した通りである。

さて之を直訳すると

善いかな田を作る前の田を作る、善いかな前の田より遠い田へ入る、ゆくところ宜しいかな、善いかな桑と麻の種をこれ滋せん（ひろめん）。善いかな繭と麻と、麻も繭もキヌとすべきなり。善いかな田衣のキヌとすべし。善いかな銀の壺を並べて、善いかな水をこれくむ、水を持ちこれとともに、善いかな富も〓（く）むところぞ。

意訳すれば、

よい事だ田畑をつくるのだ。門前の田面も作り、又遠い野良にも出かけて行く。何処へ行っても上出来で嬉しい、たのしい。桑を作って蚕を飼って繭もとる。麻の種を蒔いて麻をしとねて熟すると皮をむいてこれから麻糸をとる。繭も麻も織って衣服に仕立てる。ああ嬉しいああ楽しい。繭絲や麻糸で美しい野良着、丈夫な野良着をどっさり作るのだ。お米でお酒もこしらえるのだ。出来たら銀の壺にお酒を盛り並べてさあ豊年祝いや。お酒をくむんじゃ、ああ嬉しいああたのしい。又お酒と一緒に富もくみとるのじゃ。めでたしめでたしじゃ。この歌謡がすむと、二義に廻って三度耕すまねを上手にする。耕しおわるとまた太鼓を打って皆一緒に歌うのである。その歌の文句は

はるたにおりるなら云々と前記の通りでその漢訳も前訳の通りである。

さて、直訳すれば

春の田に下りて稲の苗の葉をこれ見る。手に摘み入れて社に詣る。壟上より遠畦をこれ見る。稲の苗は連綿として滋蔓するところを

意訳すれば、

春の田に来て苗代田を見ると苗が立派に育って居る。この苗の葉を手に摘み入れて持ち帰ってお宮にまいって豊年万作を祈念する。高い畠で遠い植付のすんだ田圃を眺めると青々と立派にせいよく育っている。十日の遠黒みである。

この歌が終ると今度は田を見廻りのお役人お奉行様が裃をつけて刀をさして出て来る。お奉行様はゴマシオ頭で腰も少したがんでいる御年輩の方で左手には扇子を持ち右手には𩝐（モチ：米のモチ）で作ってあるさし傘を持っている。おモチは直径一尺有余でまん丸くて鏡の様である。おモチの中央に青竹の柄をさして傘の形にしてある。実に奇抜な大傘である。このおモチは冬月の中について之をお櫃（ひつ）の中に入れて置くのだそうな。それが万一にも割れたり缺けたりするとその年は旱魃になると昔からの言伝えだので用心して貯えて置くそうである。さてお奉行さまは右に一廻り廻ってから大声をはり上げて言うには「よなんどうよよなんどうよ云々」

之を例によって直訳すれば、

稲人よ稲人よ稲人よ、今年の豊熟は観音第一の〓（た）の佳き稑（わせいね）を播くことなすべし。福塚の犂牛耕馬鞭をとり轡をとって各々苗種の設けをなして五万人来って爾（そ）の事に従え。米塚（よなづか）の耕牛犂馬后（うしろ）を逐い、前を駆り立てて自ら苗種の儲けをなして五万人来り集まることすみやかなれ。

意訳すれば、

稲を作り田を作る人々よ。皆の者よくきけ。今年の秋の豊年を期するためには観音領内第一の田圃から採ったよい早生稲の種子を播くことだ。そのために早く苗代を作るのだぞ。それっ。福塚の牛も米塚の馬も皆かり出してその鼻をとり尻をたたいて駆り立てて、田を耕すがよい。そして、少しも早く籾種（もみだね）の用意をしろ。苗代を作れ。観音領内の五万人の農夫たちよ。苗代造りの時期が来た。ぬからず、さあやったやった。そうすると早速一人が白衣を背中に打ちかけて、四ツン這いになって白牛のまねをして出て来る。白牛は出てうろうろして居る。そこへ二人がスゲ笠をかぶって犂（すき）を持って現れる。そして牛の鼻取りと尻取を面白く争う。さて、役が決まると白牛を促して三度廻って耕すまねをする。白牛はモーンと鳴いたりもする。耕し終ると牛を引いて退く。これで苗代が出来た所であらう。

次に一人が小さな桶をさげてそろそろと現われて正面に立つ。この人は村では二番目の年長者で年の頃は七十歳ばかりだらう。今日のお田植祭りの主役で所謂司祠者である。そして太鼓の前に向って恭しく謹んで祝詞をのべながら、籾種を太鼓の上に播くまねをするのである。その祝詞に曰く観音第一の田のよきわせのたねどんぶどんぶ云々、

直訳すれば、

観音第一の田のよき早稲の種、丼々満山弘法大師の経ぶくろの種丼々来会人及び詣集客その貴賤上下の白鬚の種丼々

意訳すれば、

観音領内の第一の美田からとれたよい早生いねの籾種を、とんぶとんぶ、こう唱えながら三度太鼓の上に籾種をまむかねをする。とんぶとんぶは籾が水中に落ちる音であらう。次にこの財賀寺の真言開祖当山中興の弘法大師の御きょう袋の中にある籾種をどんぶどんぶ、前の様に三度まいてから、次に今日このお祭りに参詣に来り集まった僧侶俗人貴賤上下の大勢の人々の中の白鬚の年長者のめでたい籾種をどんぶどんぶ、又三度種まくふりをするのである。

次に司祠者老人は扇子を高くかかげて更に祝詞をのべる。その祝詞に曰く、「謹上散供再拝々々」云々と前記の通り。

直訳すると、

謹上散供再拝々々敬ってもうす。ここに正当する年号某干支の日月正月の朔日と五日を吉日を択び定むるものなり。春の下種は心の欲する所に従い、秋の穫納は畝町毎に千束町毎に万束、畦上も万々たらん。苗場に於いて憎むべきものは啄（ついば）み食う黄雀と貪り食う黒烏、畦を穿つ碩鼠（せきそ）、根を鑿（こが）つ土竜、蹂躙する水鼈（すいべつ）、之を退くつに於ては、おもえらく、豊年をならん。山の物に於ては、峡を走る麋鹿（びろく）、沢を奔る豵豝（しょうは）、峯をはしる鋭耳なる明視（めいし）、之を退くるに於てはおもえらく、登歳とならん。殖えてのち懼るべきものには、洪水と大風と、蝗蟲（いなご）と蟷螂（かまきり）と、芃々（ぼうぼう）たる幽莠（ゆうしゅう）の和融萌生して、長哉長哉となり、里長の所にて雑劇をなさんか、祝賀をなさんかを聞けば、哲人を賢者となる彼は仰いで思い、俯して惟んみて之を何処（いづこ）へ穰（はら）うべきかを告ぐ。京都に於ては稲荷と祇園と住吉を八幡と、法性寺と法勝寺、是より西は筑紫の博多か泥海か、之より東は暘谷（ようこく）か、嵎夷（ぐうい）の土か泥海かに、之を放つべし。ここで京都方面の稲荷、祇園、住吉、八幡は有名で、誰知らぬ人もないが、法性寺と法勝寺とは現今では知らぬ人が多いと思うが、その頃は全国的に有名なお寺であったに違いない。即ち法性寺は人皇第七十六代近衛天皇の御宇、文安四年藤原忠通卿が山城に創建した寺で、今から八百十三年前のことである。忠通卿は太政大臣にもなり、自分の娘三人は崇徳、近衛、二条の三天皇の皇后となっている。弟の左大臣頼通と共に皇室の外戚として重きをなした人であった。又法勝寺は人皇第七十二代白河天皇の御宇、承保二年山城の白河に創建された寺で今から八百八十六年前のことである。はしがきにも一寸のべた通り、頼朝が財賀寺に仁王門を寄進した小百年前のことである。

さて、意訳すれば、

謹んで御供物御神酒を宝前にささげまつって、再拝また再拝、敬って申上げまするには、ここに昭和三十六年辛丑の年の日と月、月は正月、日は朔日と五日とを吉日良辰と択び定めて、正月五日にこのお田植祭りをとり行いまする。何卒このみまつりが、滞りなくうるわしく、仕うまつれる様、おまもり下されませ。今年の春の籾まきは適当なよい日に思いのままに播きつけまする。秋の取入れはと申せばセマチ毎に千束、又万束、アゼに生えた稲草まで沢山の実をつけて、豊年大豊年となさしめ給え。このために苗代に於て憎むべきものには折角播いた籾種を拾って食べてしまう雀や烏どもと、播床の上をのたくり廻って滅茶苦茶にするドウツン亀である。又、アゼ小穴をあけるケラや大穴をあけて水をもらすムグラモチである。この等を退治したら豊年になるじゃろう。又お田植がすんでから、稲田を荒す悪者は山では谷間を走る大シカ小ジカ、沢辺をかけ廻る大イノシシ小イノシシ、峯の辺りをすばやく飛びまわるお耳の長いウサギの群である。これ等を退治したらきっと万作になれるじゃろうて、。又秋になって稲が穂を出してから恐ろしいものは大風である。大嵐である。一夜の中に白穂になってしまうからである。又洪水も恐ろしい。害虫では、イナゴとカマキリだ。悪い草の王はヒエであろう。田に生えるヒエは稲によく似て居るが根が雑草であるから、生えたと思うと直にフワフワと肥えて、何時の間にやら稲草よりも丈高く成長して稲株を占領し、稲草を圧倒する。ヒエ抜きやヒエ刈りは必ずやらねばならぬ。イナゴやカマキリも平げなくては稲の大敵じゃ。田の草をとる、田の害虫をとる、田を荒らすケモノを追い払う、これは農夫で出来ること、併し洪水を大風はどうしてその災禍よりのがれるか。そのためには、このお祭りをめでたく縁起よく面白くおかしく愉快に舞い踊って何処そえ災をはらい捨てたらよかろう。何処へはらいすてたら一番よいのかと村一番のお年寄りでしかも賢い世故にたけた老人に伺うと、老人はしばらくは天を仰いで考え、又うつむいて思案してはたと膝を打って、よしわかったこうしなさい、と告げて下されました。その災いは京都方面のヤシロで申すなら稲荷か祇園、又は住吉か八幡でテラを申さうなら法性寺か法勝寺がよい。これ等の寺社へ納めて請取って貰うがよいぞ。又これより西の方に当って遠く筑紫の国がある。その国の博多、その博多の向こうの広い広い泥海の中にほうり込んでしまわっしゃれ。又これより東で申せば、あのお日様の出る遠い遠い山を山との間の平らから所、その向こうのヒナビトの住む国のはて、その又向こうの泥海の真中にぶち込んでしまいなされ。そすれば、この秋のとりえれは大豊作じゃ。喜びなされ。とまあこんあ意味だが、ここに一寸面白いことには、イナドとカマキリを害虫にしているところです。イナゴは稲葉を食うが、イナゴの居る所に必ず居るカマキリはそのイナゴを捕食しているので、云うなれば益虫であるが、上代人はこれを一しょくたにして、共に憎むべき害虫を宣言して居る所など、如何にも純真で幼稚な上代人の観察が却ってほほえましい。

さて、今度は田畯、即ち田を見廻りの御奉行様が出て声はりあげて申さるゝようは「よなんどうよ、よなんどうよ云々」。

例によって直訳すると、

稲人よ、稲人よ、稲人はあく醇酒に酩酊したりならびなき苗なり。良い苗なるかな。上葉はぬきんでたりな。観音の第一の田のよきわせいね蓻（う）うるべきなり。福塚の耕牛犂馬、鞦（しゅう：牛の尾にかけるつな）をおし、靶（は：たずな、くつわをとるつな）をとって田夫田女よ食をつゝみ、鋤鍬及び蓑笠の設けをなして五万人速かに来るべし。米塚の犂牛耕馬、尾を叱し、頭を咤し、田夫田女、職をつゝみ鎡錤（じき：くわすき）襏襫（はつせき：雨衣、かっぱ）茅蒲（ほうほ：すげ笠）の儲けをなして五万人早く来るべきぞ。

意訳すれば、

稲を作る人たちよ、お百姓の者共よ、朝からよいお酒によってよい。ご機嫌じゃないか。さあ、今日はお田植だ。田圃へ出かけた出かけた。ホウすばらしくよい苗じゃないか。天晴れな苗は。上葉はピンとたって居てしっかりした苗じゃ。観音領内の第一等の田のよい早生稲からとったよい種まいて出来た苗だもの、良くなくて何としよう。福塚の牛も米塚の馬も手綱を取り尻がいをつけて用意して田に出ることだ。男も女も皆早くスキクワやミノカサ弁当も包んで田圃へ出ること。観音領内の五万人の農夫、一斉に田に出てお田植をするんだぞッ。鍬に備中、雨合羽、帽子も用意して苗代田へ出て苗取りするだ。」

この声に応じて、三人の田夫は出て来て扇子をもって苗とりのまねをする。そして、苗をとりながら歌をうたう。その歌に「あさなへをとる、おなごの云々」

直訳すれば、

早苗を採る女子の手は手と手とこれゆへ相引いてこれゆへ我がとる苗は三穂出て四葉出て田面茁茁（さつさつ：草の伸び茂る貌）たらん。

意訳すれば、

早苗をとる農婦たちの手は、なれて上手で右左の手を動かし続けて一しろ二しろ見る見るうちにとり進む。わがとったこの早苗はよい苗だから本田に植えると直にありついて芽も出る葉も出る穂も咲く。田面どんどん。茂ってゆく。日増しに稲株もふえてゆく。どうかよい田になっておくれ。

次に、苗を三度、苗を太鼓の上に投げる。そして、三人の田夫はすげ笠をかぶって扇子と苗とを持って、お田植のまねをする。田を植えながら、声をはりあげて、田植歌をうたう。歌の文句は「あさはかにとみるたをうえる云々」

直訳すれば、

早朝富の田を植える。手と手とこれゆへ引いてゆくところぞ。京より来る黎（クロシ）節の稑は稲三把にて米八斛なり。実に福禄なるかな。黧（クロシ）節の稲はこれ芟刈（かりかり：共にカル）し、歛穧（れんせい：かり干したるイネ）し、七世に栄えんかな。

意訳すれば、

朝早くから上田に苗を植える。左手に苗を持ち、右手で苗をさしてゆく。左手で苗を分けて、右手で苗をうえてすゝむ。上手に舞う様に手早く植えさがる。京から伝わったと言う、節黒の稲の苗をうえる。珍しい多収穫の品種であるから稲三把がお米が八石とれるとや。あゝめでたい、めでたいしよ。それ稲刈りだ。ザックリコ、ザックリコと稲刈だ。上天気だから、刈り干しだ。田圃一面にかりほしだ。年毎世毎に栄えゆく。七世に栄える。弥栄稲だよめでたいめでたい。

この田植歌がすむと、次に又三人がここに現われる。その内の一人は女の着物を着て、木で作った人形を背中におんぶして出て来る。（襁負：襁は初着のこと、子供を負うおび半天のこと）更に一人は、酒樽を持って、出て来る。又一人は、オヒツを大切そうにかかえて出て来る。それから、そのオヒツを開いて、皆にお弁当を御馳走するのである。詩経に彼の田畝に饁す云々とあるが、詩経そっくりの風景なのか、因みに詩経とは約二千年程前に中国でうたわれた民謡などを集めた本の名である。三百餘編あって、聖人孔子が撰集したものと言伝えられる。さて詩経の豳風（ひんぷう）七月篇の中に「三之日于耜　四之日挙趾　同我婦子饁彼南畝田畯至喜」とあります。訓み方は、三の日こゝにすきし、四の日趾をあぐ。わがよめこどもとともに、彼の南畝に饁（よう）す。田畯至りてよろこぶ。意味は、お正月には鋤鍬の手入れをして用意をする。二月になると若者は田に出て田を耕す。足をあげて耕す。年寄衆はヨメと子供をつれて、南の田圃へお弁当をはこぶ。田を見廻りのお奉行様も丁度そこへ見えて、大へん御満悦である。この豳風七月篇には農村の一年十二ヶ月の農事の様子が見に見える様に面白くよんである。それはさておき、ここへお奉行様が出ていらして申さるゝには、「酒の泉で白牛を洗い、飯の山に於いてあげよ」そうするとそこへ白牛が出て来る。祭主の老人がそこへ出て来て、扇子で牛をあおぐ。牛の後に廻り三度白牛を廻ってあおぐ。お酒で牛を洗うまねであろう。何と景気のよい事かめでたい限りである。この祭主老人は、足で地面をトントントンと踏み鳴らしながら「鶴と亀とのご祝いご祝い」と三度、節をつけて歌うのである。これで千秋楽となる。役人（やくうど）十一人は一ヶ所に集って、お赤飯をたべたりお神酒をのんだりして、お飯もお酒もすっかりと平げてしまう。そうすると真先にお奉行様が起ち上って、オモチを抱きかかえてその柄を杖につきながら、鹿瓜らしうすまし込んで、階段を下りて去って行く。続いて祭主老人が色々の献供物をとり下げてヤレヤレまず以て滞りなくお祭りもすんだと、嬉しそうにニコニコし乍ら去ってゆく。それに続いて、外の九人も各々器具などを持って去る。これでお田植祭りは全部すんでお開きである。参詣人、拝観者も皆解散して静かな境内と相成るのである。之よりさきに財賀寺の住持は衆僧を従えて観世音宝前の道場に入って法を修し、経をよむのである。これがすんでから、お田植祭りは始まるのであって、僧侶はそれからはたゞ見物するだけであって、お祭りには加わらないのである。併しお寺の中でこのお祭りが行われるのだから、住持にはお祭りの事は委細報告はするのである。一体この禳田祭は何時代からはじまったのか誰もはっきりとは知らない。只、昔からやる通りにやって来たのであるが、おまつりで歌う歌や唱える祝詞は仮名で書いた覚えがあるだけで、又方言が雑って居たりして読みにくゝ、解りにくい。一寸聞くと甚だいやいい下品の様であるが、よく聞いて居ると、古雅な点もあり、又ユーモアにも富んで居て、仲々どうして捨て難い貴重なものゝ様でもある。わしはこの寺に住持となって数ヶ年、毎年この祭りの度に色々と考えさせられる。今度戯れに一篇の文章を綴って観禳田記として後世に残すが、わしは元来学問もあまり深くないので、祝詞歌謡を漢文漢詞に翻訳するのに果して適訳であったか自ら保障しかねる次第である。もっと正しく立派に訳すべきだが、わしの訳したものは、蛇に足を付けた様な、却ってない方がよいシロモノかも知れない。時に宝暦二壬申正月丁卯現住昶如しるす。